様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２９日現在

機関番号：13601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520320
研究課題名（和文）　バルザック『セザール・ビロトー』の生成論的研究

研究課題名（英文）　A Study on manuscripts of Balzac’s *César Birotteau*

研究代表者
鎌田　隆行（KAMADA TAKAYUKI）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：30436985

研究成果の概要（和文）：フランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫所蔵のバルザック『セザール・ビロトー』の生成資料の読解調査を行なった。この調査によって、特に小説内における二つの架空の広告文の導入がパリの産業界の描写に新たな広がりをもたらしたことを明らかにすることができた。調査結果は複数の国際研究集会等で発表し、バルザック研究や生成論研究の専門家と意見交換を行なった。

研究成果の概要（英文）：We explored genetic documents of Balzac’s *Cesar Birotteau* (Library of the Institut de France, Lovenjoul Collection). This investigation allowed us to show especially that the invention of two fictive advertisement billings in the novel has brought a new dimension to the description of industrial universe of Paris. We presented in several international conferences the results of our investigation, and exchanged opinions with specialists of Balzac and Genetic Criticism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：仏文学

１．研究開始当初の背景

（１）バルザック研究における生成論の展開としては、この領域の第一人者であるステファンヌ・ヴァッションが、『人間喜劇』所収の作品が互いに密接な関連性を持つことを重視し、1990 年代以降、「マクロジェネティック」を推進してきた。これはバルザックの作品群全体の構築と統合の様態について、個別の版本の出版・再版年月、互いのテーマ的な相互影響の状況や全体計画の変動を分析することを主眼とした包括的アプローチである。1999 年に行われた国際バルザック研究会主催のシンポジウム「バルザック、永遠の生成」においても、バルザックの生成論の方法論的主軸はマクロジェネティックであることが確認された。

（２）しかし、こうしたマクロジェネティックは版本やプラン、目録の検証を中心とするため、草稿や校正刷りといった、版本の準備に使われた資料の調査は手薄になる。バルザ

ックは自らが制作に使用した草稿や校正刷りを創作の労苦を刻印したものとして保管し、またしばしば知人らに寄贈していたが、没後、その多くは碩学ロヴァンジュール子爵が入手するところとなり、現在ではフランス学士院ロヴァンジュール文庫に所蔵されている。五百帖にも及ぶこれらの膨大な原資料は、研究者による実物の閲覧が可能な状態でありながら、1960 年代までの伝統的な草稿研究以降、本格的な生成研究の分析対象となっていない。

（3）したがってバルザック生成研究の新たな展望を開くために必要なのは、マクロジェネティックによる成果を補完し、個々の作品の執筆がマクロレヴェルでの作品群の統合化といかなる関係を持っているのかを解明する具体的な草稿・校正刷りの分析である。研究代表者はこうした観点からこれまでにバルザックの代表作である『幻滅』の第二部『パリにおける田舎の偉人』(1839) の生成資料の分析を行い、2006 年に著作として刊行した。また、その後も国際研究集会での発表や紀要論文の刊行等により、バルザックの執筆方法の特徴や小説美学との関係について考察を進めてきた。これらの研究では特に、執筆と校正の作業が一体化しており、テクスト前半部の校正を行いながら後半部の草稿を書き進めるバルザック独自の制作方法を明らかにした。

２．研究の目的

（1）本研究は上記の個人研究の成果の延長上に位置づけられる。『パリにおける田舎の偉人』とほぼ同時代の作品で登場人物を共有するなど密接なつながりを持ち、また草稿や校正刷りの大半が良好な状態で保存されている『セザール・ビロトー』(1837)の分析を主眼とする。

（2）具体的には、『セザール・ビロトー』の構想過程、テクストの発展段階と意味作用の変容、そしてまた同時期の他の小説作品との主題的な影響関係、またバルザック独自の手法である再登場人物の形成と展開の検証を行なう。

（3）さらに、これらの分析をもとにして、後の『人間喜劇』の形成にとってきわめて重要な時期である 1830 年代半ばのバルザックの制作活動、とりわけマクロレヴェルの作品群の統括とミクロレヴェルの具体的な作品生成のダイナミズムとの関係を解明することを試みる。

３．研究の方法

（1）基本情報の整理として、プレイヤード版やクラシック・ガルニエ版などの重要な校訂版や先行研究による注解を総合的に参照し、これまでに明らかになっている『セザール・ビロトー』の作品生成の経緯や関係資料の所在を全般的に確認した。同作品については多くの先行研究が存在するが、本研究に最も直接的に関わる論点として、作中人物であるビロトーやポピノの商業戦略を同時代の、あるいはその後の時代を先取りした先鋭的な試みとして捉える複数の先行研究がある。全般にはパリにおける高度産業社会の創生期を描いたバルザックの現実描写を評価するものであるが、論者によっては、現在のマーケティングや広告戦略に照らしても手法が徹底しているとする読みを提示している。他方、生成論的コメンタリーとしては、クラシック・ガルニエ版のピエール・ロブリエの注解が優れており、執筆の時間的推移や他の作品の進行状況との比較など、重要な基礎情報が提供されている。

（2）大学の夏季休業の時期などを利用して渡仏し、フランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫にて原資料（草稿および校正刷り）の調査を行い、分析を進めた。当該資料に関し、まず全体の構成内容やテクストの前後関係の整理を行い、作品生成に関して特に重要など思われる箇所を中心に転写作業を行いながら、資料の精読を行なった。

（3）同時期のバルザックの他の作品との相互影響関係を詳細に考察するために、『ニュシンゲン銀行』など『セザール・ビロトー』に直接関連するロヴァンジュール文庫所蔵のバルザックの他の作品の生成資料についても適宜、参照した。

（4）国内外の研究者と情報交換や意見交換の機会を持ち、バルザック研究や生成論研究の最新の展開を把握するとともに、本作品に対する解釈的知見を深めることに努めた。特に国際バルザック研究会(GIRB)では執行部メンバーであるとともに、後述の生成論シンポジウムの運営担当者として国際的な共同研究の推進にあたり、また 2010 年 9 月まで名古屋大学文学研究科グローバル COE 拠点「テクスト布置の解釈学的研究と教育」で事業推進担当者を務め、国際研究集会などの多数の研究イベントに関わった。これによって日本、フランス、仏語圏諸国の第一線の研究者と緊密に交流する機会を持ち、本研究の成果を提示し、刺激的な討論を重ねていくことができた。

４．研究成果

（1）本研究により、『セザール・ビロトー』の成立の経緯に関して、資料的な情報を整理した。現時点で最も総合的に情報がまとめられているプレイヤード版における同作品の注解にいくつかの記述の不備や単純な誤記があり、原資料と対照することで正確な情報を得ることができた。そのいくつかは刊行された成果内で明らかにしたが、今後、資料体

全体の正誤表などを作成することも計画している。
（２）より本質的な問題として、同作品の制作途上での内容の変容に関して、原資料の読解をもとに複数の点を明らかにすることができた。作品の解釈自体の問題にも深く関わる重要な点であり、概要は次の通りである。
①作中に見られる二つの架空の広告文（それぞれ作中人物であるビロトー、フィノに帰せられる）の本文について、執筆・校正の作業段階での導入の様態が確認できた。第一の広告文（ビロトーの広告文）は再校時に導入されており、校正の初期段階というバルザックにおいて最もテクストの変動が大きい段階で登場している。第二の広告文（フィノからポピノに提供された広告文）はこれより後に書かれた草稿に見られ、その連鎖反応としてもたらされたものと考えられる。執筆を行いながら重要な諸要素を着想し、それに応じてテクストを再構造化していくという、他の作品にも見られるバルザックの制作上の特徴がここでも現れているのである。
②第二の広告文に関して、当初、書き手をダランクールなる劇作家の登場人物（再登場人物ではなくここで初出）にしていたバルザックは、校正の際に再登場人物のフィノに変更した。これによって、ジャーナリストの登場人物フィノは『ニュシンゲン銀行』と『しびれえい』(『娼婦盛衰記』) での再登場を経て『幻滅』第二部での新聞業界の黒幕の一人として準備されていくことになる。『セザール・ビロトー』ではこの人物名の変更を契機に場面全体の大幅な書き直しが行なわれていることが確認できる。商人（ポピノ）・広告執筆者（フィノ）・販売員（ゴーディサール）の分業による先鋭的な販売戦略の討議の場が描かれていったのである。これらから、バルザック自身の複数の作品群にまたがる間テクスト的操作（再登場人物網の再編）と一作品の内的構造化が相互に影響し合って進められていることが判明する。かくしてこの作家におけるマクロ生成とミクロ生成の交錯を考える上で極めて重要な事例が分析できたと考える。
③印刷業や活字鋳造業の経験があり印刷技術に長けたバルザックは、二つの広告文について、数次の校正段階を経て活字フォントの使い分けなど印刷上の工夫を凝らし、きわだった視覚上の効果を持ったテクストの作成を実現した。ページ上の位置にも配慮し、本文の分量を入念に調整した結果、初版では両広告文とも右ページ(belle page)から始まるように配置されている。バルザックの作中にしばしば見られ、この作家の書物の物質性に対する鋭い眼差しを証する「テクスト内テクスト」の技法の発展において、本作品に見られる事例が重要な役割を果たしていたことが確認できた。
（３）本研究の成果については、国内外の研究集会の場や報告集・紀要において発表した。主なものは下記の通りであり、複数の国際研究集会の場において報告を行い、バルザック研究や生成論研究における国際的な第一線の研究者と率直な意見交換を行い、知見を深め、また諸々の情報を補完することができた。
①2009 年 10 月、フランス・メーヌ大学で行なわれた国際シンポジウム「作家と印刷業者」に参加し、「オノレ・ド・バルザックにおける校正刷りの技法の機能」の題目で、この作品の生成過程をとりあげた論考を発表した。シンポジウム参加者の文学研究者や書物史の専門家たちとの意見交換を行なった。書物史の大家フレデリック・バルビエ氏に拙論の発表の司会を務めていただき、同作品に見られる活字の使用法などについて有益なコメントを得ることができた。印刷技術に通じていたバルザックが、むしろそれゆえに一般の印刷ノウハウでは許容されないような執筆＝校正プロセス（印刷すべき「本文」の全容を確定せずに入稿し、校正刷りを「草稿」として用いる）を創出したことの逆説を、こうした討論を通じて明らかにすることができたと考えている。
②2010 年 6 月、フランス・パリ＝ディドロ大学において、国際バルザック研究会主催の国際シンポジウム「バルザックと他の作家の作品生成の交錯　エディションの歴史」をジャック・ネーフ氏とともにコーディネーターとして企画・運営した。このシンポジウムは、複数の作家を対象としつつ、印刷本を含めた「広義の生成論」を適用することによって生成論の新たな可能性を探るという目的を持ったものであった。従来的な意味での生成論研究者以外の専門家も交え、文学作品の創造、支持体の物質性、書物の多様な表れのダイナミズムを相関的に捉える討論の場を実現することができた。また自身でも「縫合の場―バルザックにおける作品内・作品間的活性の軸」の題目で発表を行い、一作品中の大きな変更点において複数の再登場人物を導入する手法など、作品群にまたがる生成運動の機序を分析した。
③2011 年 3 月、フランスの近代草稿研究院(ITEM)の主催による「セミネール・バルザック」に、コーディネーターのステファンヌ・ヴァッション氏の招きに応じて講演者として参加し、「『セザール・ビロトー』における広告文の生成」と題した講演を行い、質疑応答や関係の専門家たちとの意見交換を行なった。バルザックの生成論研究の第一人者であり、マクロジェネティックの推進者であるヴァッション氏が、拙論で示した個別作品の資料調査によるミクロレヴェルとマクロレヴェルの生成運動の関係様態という問題系

の提示に対して賛同し、さらなる展開を期待する旨表明してくれたのは大いに励みになるものであった。
④2011 年 12 月、名古屋大学文学研究科グローバル COE 第１３回国際研究集会「哲学的解釈学からテクスト解釈学へ」に参加し、「解釈の問題に試される生成批評」の題目で発表した。生成論全般の解釈的射程の争点を整理するとともに、バルザック研究における生成論の展開と現状の問題、今後の展望を考察し、質疑応答を通じて解釈学の泰斗ジャン・グロンダン氏および十九世紀フランス文学研究の重鎮であるピエール・グロード氏から多くの示唆を得た。こうした意見交換を通じて改めて確認できたのは、生成論は極端な理論的前衛性の追及や技術的な方法論の洗練による自己満足に陥ることなく、いかに解釈の刷新に寄与しうる読解を誘発しうるかという地道で根源的な実践を目指すべきであるということで、きわめて有益な対話の場であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
① 鎌田隆行, La critique génétique à l’épreuve de la question de l’interprétation, in Kazuhiro Matsuzawa (dir.), *De l’herméneutique philosophique à l’herméneutique du texte*, Université de Nagoya, 2012, pp.65-70, 査読なし.
②鎌田隆行, Balzac ou la genèse du texte dans sa matérialité, in Éric Bordas, Jacques-David Ebguy et Nicole Mozet (dir.), les actes du colloque « Un matérialisme balzacien ? », Groupe International de Recherches Balzaciennes, 2011, 査読なし. URL :http://balzac.cerilac.univ-paris-diderot.fr/materialisme.html
③ 鎌田隆行, Fonctionnement de la technique des épreuves chez Honoré de Balzac, in Alain Riffaud (dir.), *L’écrivain et l’imprimeur*, Presses Universitaires de Rennes, 2010, pp.279-291, 査読なし.
④鎌田隆行, バルザックの生成論的研究――問題点と展望, 日本フランス語フランス文学会中部支部『研究報告集』第 34 号, 2010, pp.33-52, 査読あり.
⑤鎌田隆行, Notes sur l’autodéfinition de la critique génétique : problèmes de contraintes méthodologiques, *HERSETEC. Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*, Vol.3 No.1, Université de Nagoya, 2009, pp.99-105, 査読なし.
⑥鎌田隆行, Le dynamisme circulaire dans la genèse de l’œuvre balzacienne. Autour de *César Birotteau*, in Kazuhiro Matsuzawa (dir.), *Balzac, Flaubert. La genèse de l’œuvre et la question de l’interprétation*, Université de Nagoya, 2009, pp.23-33, 査読なし.

〔学会発表〕（計６件）
① 鎌田隆行, La critique génétique à l’épreuve de la question de l’interprétation, 名古屋大学文学研究科グローバルCOE第 13 回国際研究集会「哲学的解釈学からテクスト解釈学へ」(名古屋大学), 2011 年 12 月 11 日.
②鎌田隆行, バルザックにおける諸作品間の生成の統括――『セザール・ビロトー』を中心に, 関西バルザック研究会（大手前大学）, 2011 年 8 月 27 日.
③ 鎌田隆行, La genèse des textes publicitaires dans *César Birotteau*, 近代草稿研究院(ITEM)「セミネール・バルザック」（フランス・パリ高等師範学校）, 2011 年 3 月 5 日.
④鎌田隆行, Points de suture : un axe de dynamisation intra/intergénétique chez Balzac, 国際シンポジウム「バルザックと他の作家の作品生成の交錯　エディションの歴史」(フランス・パリ＝ディドロ大学), 2010 年 6 月 4 日.
⑤ 鎌田隆行, Fonctionnement de la technique des épreuves chez Honoré de Balzac, 国際シンポジウム「作家と印刷業者」(フランス・メーヌ大学）, 2009 年 10 月 9 日.
⑥鎌田隆行, バルザックの生成論的研究―問題点と展望, 日本フランス語フランス文学会中部支部大会（愛知大学）, 2009 年 9 月 26 日.

〔図書〕（計１件）
鎌田隆行,『テクストの解釈学』, pp.263-293, 水声社, 2012.

６．研究組織
(1)研究代表者
鎌田　隆行（KAMADA TAKAYUKI）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：30436985

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし